

批評及び紹介

スタイン氏古代の和闐(其一)

エム・アウレル・スタイン著

Ancient Khotan. By M. Aurel Stein.

2 vols. Oxford, 1907.

此書はスタイン氏が和闐に於て行へる發掘并に研究を詳述せる大著にして、東洋史の研究に種々の資料を供給し東西學者の賞讃を得たる名作なり。分ちて二卷となす、第一卷には論述を載せ、第二卷には和闐及其他に發掘し或は撮影せし實物・風景・史料等を集む。論述の部分は本文十五章附録七篇あり、其目次左の如し。

序論
第一章 カシエミールよりバトミールに至る.....	四節

第二章 サリーコル及びカーシユガルに至る通路.....	四節
第三章 カーシユガルの歴史.....	四節
第四章 カーシユガルの古蹟并にヤルカンド及びカルガリクの地方.....	四節
第五章 カルガリクより和闐に至る通路.....	五節
地誌及び古蹟.....	五節
第六章 和闐の地理及び民族.....	四節
第七章 和闐の歴史.....	四節
第八章 和闐の古蹟.....	五節
第九章 ダンダイン・ウイリクの古蹟.....	八節
第十章 ダンダイン・ウイリクよりニヤ川に至る地方.....	三節
第十一章 ニヤ川以外にある古蹟.....	三節

第十二章 エンデレの古址……………四節

第十三章 カラトングと西域記の娑摩城の搜索……………四節

第十四章 アクシビル及びブラワクの古址……………五節

……………五節

第十五章 和闐發途……………

附録七篇の目次左の如し。

(一) ダンダーン・ウイリク、ニヤ、エンデレ三地

發掘の支那古文書……………翻譯註解

……………シヤヴンヌ氏

(二) エンデレ發掘の西藏古文書……………

……………パーネット氏フランケ氏校閲

(三) ダンダーン・ウイリク發掘の希伯來波斯二

語對照古文書……………

……………マルゴリオ氏校閲

(四) 古錢表 ブッシュェル、ラブソン二氏調査

(五) 西藏所傳の和闐記事……………

……………トーマス註解

(六) 和闐地方發見の古壁……………

……………チャーチ氏説明

(七) 和闐地方の砂石及び土壤……………

……………ローチツイ氏説明

此の如く内容甚だ豊富にして、詳細に亘りて之を解説すること困難なるを以て、今序論の次に便宜上著作の主眼たる和闐地に關する部分を解説し、追ふてカーシユガル地方に及び、最後にパーミール方面に至らんとす。

序論

一八九一年英國陸軍大佐パーワー氏 (Boyer) が庫車に於て樹皮に書寫せし古經を得て以來、著者は清領トルコスタンに注意せしが、迦濕彌羅史の梵本を翻譯せし爲めに其素志を遂げず。一八九七年の春譯業完結の際、ビュロー博士はデウトレル・ド・ラン

氏 (Duteil de Rhins) が和闐に發見せし古寫經の言語を研究して上世ブライクリット並に佉樓の文字なりと認定すべしとの通信を著者に送り、尋で該古寫經は露都に於て出版せられ、セナール氏はこの寫本を以て今日遺存せる世界最古の印度寫本なりといへり。ヘルン氏 (Dr. Hoernle) は庫車の古文書を説明し、印度政府はカーシヤガル、ラダーク、迦濕彌羅等に吏員を派出して考古學の資料を收集するの舉あり。著者は印度バンジャープ大學に奉職せしが、自ら起て清領トルコタン探險に従事せんと欲し、印度政府及びバンジャープ政廳の保護を受くる筈なりしも、一八九九年カルカッタ、マドラス管區教育總監に任せられ、一時探險を中止せしが、後印度政府及びバンジャープ政廳より一萬一千ルービーの補助を受け、印度測地部長ゴリア氏は一名の測地専門家をスタイン氏に隨はしめ、二千ルービーを補助せり。和闐到着後は支那官憲の厚意を蒙り、印度政府カー

シヤガル駐在官も種々の便宜を與へられ、和闐及び其他三千哩以上の探險を行ひ、終始『西域記』を以て指南となせり。探險によりて得たる結論は(一)東西に存する種々の文化が和闐にあり、(二)歷代佛教國たり、(三)西曆第九世紀まで和闐に行はれし佛教書は梵書體 (Brahmi) のもの多し、(四)東西美術融合の産物たる健駄羅式の佛教美術が盛んに和闐に行はれたり、(五)支那、印度、西藏、波斯の文書を傳へ、此等諸國と和闐との交渉を立證す、この五個條に歸するものとす。

第一編 和闐の地理及び民族

第一節 和闐の地理

和闐は清領トルコスタンの西隅に位し、北に沙漠、南に崑崙山系あり、和闐附近の河水は皆崑崙山より出て北流して Tarim 河に入る、大なるもの二あり、東にあるを白玉河 (Yurung-Kashi)、西にあるを黒玉河

(Kara-Kash)と云ひ、和闐附近の土地に灌溉の利を

與ふ。この二河の距離僅に十三哩なるも、之より南北に延びたる良沃の耕地を形成し、以て崑崙の麓に及ぶ。スタイン氏は現代和闐の西北十六哩に於て多くの古址を發見せしが故に、古代の手闐は今の和闐より少くも西北に擴がりし市街なりしこと明にして人口減少、行政頽敗の結果衰ふるに至れり。著者は地下より千五百年前の土壤を取り、附近に存する諸種の土壤と共に携へ歸り、ローチツイ教授 (Prof. Loess) は自ら沙漠地方の諸市より携へ歸りし土壤に比較し、農産物の營養に必要な物質を包含する有用の地質なりと認定したり。元來清領トルコスタンの諸地は沙漠が東西に延びて横はれるを以て南に崑崙山系を負へる南道の諸國は地勢上南北に延長すべからずと雖も、和闐地方にありては沙漠が南北に延び、二河之に平行して流るゝを以て、和闐のみは南北に境域を擴張するを得たりき、是れ于闐が南道に

ありて久しく文化の中心たりし理由の一なり。

第二節 和闐の産業

現代の和闐は河水を引て多くの掘割を造り、この水利の區域によりて全市街を十二區に分ち、各區に少きは千戸、多きは五千戸、合せて二萬七千五百戸あり。物産には米・麥・綿・桑等あり、果物には葡萄・桃・杏・林檎・西瓜あり、桑あるが爲に養蠶盛大となり、葡萄は乾して阿克苏、庫車等に輸出す。古來和闐の名産は玉(トルコ語 Kash)にして河床に於て之を採集す、白色又は淡色の玉は白玉河に産し、綠色又は濃厚色の玉は黒玉河に産す。解説者は支那の史料を見るに、『梁書』^{卷五}十四于闐傳に單に玉河の名を擧げ、『西域記』^{卷十}瞿薩旦那國の條に「產皇玉驚玉」と説きて白玉黒玉の區別をなせり、『五代史』^{卷七}十四于闐傳には三流の玉河ありとして「東曰白玉河、西曰綠玉河、又西曰烏玉河、三河皆有玉而色異」と傳ふ、然る

に現地理にては白玉河・黒玉河の二流あるのみ、唯だ黒玉河の上流、崑崙の方面よりも品質の劣れる綠玉を産すとすへば『五代史』は之を誤傳して綠玉河を加へしものゝ如し。玉は、古來于闐の名産にして支那にては崑崙の玉と稱し歷代之を珍重したり、外國殊に支那本部に對する輸出品は主として玉なりき。

玉は携帶に便にして又價高きを以て玉を携へて支那本部其他に往來する于闐の商賈頗る多し。西洋所傳の記録にても、ジェスイット派の宣教師ベネディクト・ゴーツ (Benedict Goetz) は一千六百三年より同四年の間にヤルカンドを通過し、この國に玉あり、其價貴く、支那の君主貴族之を珍重收集するを以て商人は困難を冒し、經費を投じて于闐より之を得、之を携へて支那に往來すとすへり (Tule, Cathay, II.

564)

和闐は清領トルコスタンに於ける養蠶の中心たり、人民繁榮の要因も亦一に之に存す、玄奘の所傳

には、此國の養蠶は東國より于闐に傳來せりといへば支那西部より輸入せしものか。希臘の記録によれば、絹はセレス (Serres) の國に産し、波斯を経て傳來せりとし、トルミーは絹の本國を Issedon Serica といふ、セレス國の義なり、Richthofen (China, I. 407) は、このセレスの國とは于闐なりといへり。

Procopius の傳説には西曆約五百五十年羅馬のジャスチニヤン帝の世、基督教の僧二人東方セリнда國 (Serinda) に往きて蠶を得、之を東羅馬帝國に傳へたりといふ、このセリнда國は即ち于闐なり (Tule, Cathay I. XLXII)。スタイン氏は和闐に於て古代の綿織物を發掘し、木綿織物業の起源古きを知りたり、現今綿糸織物業者一萬二千戸、年額三百萬圓に達す。于闐の毛織物業も亦古く、スタイン氏がニヤ地方に發見せし毛織物は西曆第三世紀の製品なり、『西域記』にも「出毳毼細氈」といひ、古來毛氈の製作を以て名あり、新古共に印度風と支那風とを折衷

第三節 和闐民族の分布及び

性質

せる特殊の模様ありて于闐式とも稱すべき意匠あり、現今和闐の毛織物業者約千戸、主として支那本部に輸出す。于闐に於ける製紙の原料は桑の樹皮なり、而して桑は清領トルコスタンに於て和闐のみに産するが故に、製紙業は和闐の獨占となる、スタン氏が和闐に得たる古文書は第八世紀のものありと雖も、キースナー教授 (J. Wiesner) が調査せし所によれば、庫車の古文書并にスタイン氏がダンダーン・ウイリク (Dandān-nīg) に得たる古文書を鑑定して第五世紀の製紙なりとせり、即ち于闐の製紙は第五世紀又は其以前に始まる。窯業并に硝子製造業は古代にありて一時精巧の域に達せしが、其後衰へて今日殆んど見るべきものなし。金工業は古に見るべきものなく、中世以後波斯の影響を受け、波斯風の意匠を有する銅器工藝品は清領トルコスタンに珍重せられしが、今は殆んど平凡となり、金銀細工の製品には尙ほ見るべきも少からず。

和闐の人口には異説あり、Forsyth 氏の約十三萬 (一八七三年調)、Prezavalsky 將軍の三十萬 (一八八五年調)、Djevov 將軍の十六萬 (一八九〇年調)、Seven Hedin 氏の五十二萬 (一八九六年調) の四説あれども、スタイン氏は二萬七千戸とし、一戸八人平均の數あれば合計二十二萬人ありとす。和闐に額里齊 (Ilich) 即ち和闐本部、Yurung, Kash (白玉) Kar a Kash (黒玉) の三大市あり、地方廳は額里齊にあるを以て或は額里齊のみを和闐と稱することあり。其他尙ほ小邑里ありて之に附屬す。和闐の地勢は西にカラコラム山系、南に崑崙山系、北に沙漠ありて和闐河に沿へる兩岸三百哩の叢林を通じて天山方面に達し、東方に向てロプノル湖に至るまでの南道にはニヤ以東に散在する漠中のオーシスの距離相去る

こと遠く、大部隊の通行に便ならざるを以て、外國より于闐を侵撃すること難く、蒙古及び西藏の民族は遊牧の民なれども、和闐地方は遊牧に適せざるか故に、蒙古西藏の民族は于闐を領するを欲せず。此の如き事情にある和闐は民族の變遷少く、外國人の混血に乏しく頗る種族の原形を傳ふ。歴史上の遊牧民族たる大月氏・匈奴・嚙噠・西突厥等の諸民族が順次にタリム流域に勢力を及ぼしたる時代にありて于闐は貢物を納れて服従の意を表し、漢唐時代には支那に隸屬し、一時吐蕃が勢力を振ひし頃之に歸服せりと雖も、回紇民族が吐蕃を破るに及んで于闐は再び獨立す、此の如く屢々強國の壓迫を受けたりと雖も、何れも政治上の保護を蒙るに止まり、于闐の民族は是が爲めに人種上の變化を生ずることなかりき。トルコ民族の部將 Satok Boghra Khan 及び其統が清領トルコタンを領するに及びて、于闐も其勢力の下に回教流布し土耳其語も行はるゝに至れり。『法顯

傳』の于闐の記事には「其國豐樂、人民殷盛、盡皆奉法、以法樂相娛」といひ于闐の奉佛・富裕・好樂を説き、『梁書』に于闐より彫刻の玉佛を支那に奉ぜりとし、『魏書』卷二に于闐傳には「俗重佛法、寺塔僧尼甚衆、王尤信尙」といひ、又「俗無禮義、爲盜賊淫縱」といひ奉佛の記事と矛盾せる説を示せり、然るに『西域記』には「俗知禮義、人性溫恭、好學典藝、博達伎能、衆庶富樂、編戶安業、國尙樂音、人好歌舞、少服毛褐毼裘、多衣絕細白氎、儀形有儀、風則有紀、崇尙佛法」と敍し、于闐文明の進歩を示せり。『唐書』卷三二に于闐傳には佛法の行はるゝを説き、王宮の美術的構造を有すといへり。マルコ・ポロが于闐を敍せる要領によれば土地豊沃にして、綿・麻・米・麥・葡萄等を産し、人民富裕にして産業を勵むといふ。

于闐の人民は久しく佛法を奉じ、清領トルコスタンの諸地が回教に歸せし後と雖も、尙ほ且つ佛法を

離れず、久しく抵抗の末終に回教に服従したりき。然りと雖も于闐民族の快活なる氣風は回教の信條を以て容易に感化すること能はず、今の和闐人民は他の回教民族に異り歌舞音樂に巧なり。于闐の婦人は自由の境遇にありて、内外公私の會合に列席し、男子の産業を助け、家庭必需の物品は皆婦人が購入を擔當し、市街に出る婦人頗る多し、回教の婦人はアラビヤの習慣を傳へて顔面にゼールを用ふる例なるも、和闐の婦人は決してゼールを使用せず、佛教時代に學を好みし于闐人民は回教の惡影響を蒙り、學術研究を好まざるに至り、以て今日に及べり。

第四節 和闐民族の人類及起源

スタイン氏は和闐に於て收集せる資料を提出して英國の人類學者 F. Joyce 氏に人類學上の調査を請へり、ジョーイス氏は其資料多からざるの故を以て精細なる斷定を保留し、大體の推論を與へたり、其

説によれば、和闐には蒙古民族の血統を有するもの殆んどなく、容貌・性質・頭髮・瞳色等より推してパーミール高原に住する Galcha 民族に類す、即ち Wakhan, Sarikol に定住せるアリヤン人種に似る。

和闐の中心は此の如くアリヤン人種なれども偏僻の地にはトルコ民族の血統加はり、更に遠き部分には少しく西藏人の血統を混ず。パーミール高原の人民はイラン民族にしてトルコ民族の血統甚だ少しと雖も、和闐の領内に入ればイラン民族の血統を見ざれどもイラン民族の血統加り來り、東部には西藏の血統あり Kerya 附近には蒙古の血統も入り來るを見るべし。

スタイン氏が和闐の東ダナン・ウイリクに發見せし古文書は西曆第八世紀頃の Prānā 文字を以て記述せらる、ヘルンレ氏之を鑑定してパーミール地方の Galcha 民族の方言に類する印度イラン系統の方語なりと云へり (Hoernle, Report on Central

Asian Antiquities, II, pp. 32, &c.) 而して現今和闐に行はるゝ方語も亦之に同じ『唐書』^{卷三}上^二 喝盤陀傳には「其國人勁悍、貌言如于闐こととひ、喝盤陀即ち Barkol の人民は容貌言語共に于闐に類すと説く、而してサリコルには現に Gutela 民族住するを以て西曆第七八世紀の頃に於て既に于闐の人民とサリコル人民との類似ありしことを知るべし。

次にトルコ民族の血統に就ては、Karluq Turk がタリム流域の西北を領する時代に當り、于闐は佛法を奉じ、獨立して久しく外敵に對抗し、第十世紀に至りて始めて回教に屈從せしが故に、于闐にトルコ人の血統を混ぜしは第十世紀及び其以後にありとす。第九世紀に於て吐蕃の勢力タリム流域に盛なりし時代に作られし ブラーフミ 文字の古文書が ダンダーン・ウイリク に發見せらるると雖も、毫もトルコ語を混入せざるを見れば、第九世紀以前に于闐にトルコ人の血統を混ぜしことなかるべし。然るに元來

トルコ人は武勇なる遊牧民族にして、于闐の地は産業の民に適するが故に、トルコ人は文武の官吏として于闐に駐在するのみにして、其員數も亦極めて少數なれば、次第に于闐の文明に同化せられたるが如し。後世蒙古人がタリム流域を領する時代に於ても、其本據は天山の北にありて遠く于闐に人種的混和をなすに至らず、于闐は依然人種上舊態を保持せり。又トルコ民族の一分派たる Kingidja 人がタリム流域の北部即ち Kashgar, Aksu, Kucha に來り、遊牧の舊習を脱して定住の農民となるに至りても、キルギス種族は遂に于闐に南進することなかりき、是れ即ち于闐がタリム流域北部諸國の如くトルコ人の要素を有せざる所以にして、現に カーシニユガル 人と和闐人とを比較すれば直に之を識別することを得べし。(Khotan, Fig. 22, 23 and 13a 比較)

西藏の西部と于闐とは隣接なれども、西藏と于闐との間には崑崙の大山系あるのみならず、西藏の西

部には國境に至るまで二百哩以上住民を有せず、西藏人の大部隊を出すべき中部西藏より干闥の國境まで七百哩以上に達し、西藏人が干闥に勢力を延ばすこと殆んど不可能なれば西藏の血統も亦多く干闥に入ることはざりき。又西藏人がタリム流域に勢力を振ひし期間も西紀七百九十年より八百六十年まで僅に七十年に過ぎず、其後回紇人の爲めにタリム流域より追はれ、復た清領トルコスタンに力を得ず、されば干闥に西藏人の血統少なきは當然なりといふべし。然るに Rockhill 氏が純粹の西藏人種の標本として示めせる *Dirupa* 種族は短身にして顴骨高く、廣鼻、狹顔、黒髮、褐眼なるが (*Journal of Anthropological Institute*, xxxviii, pp. 319, &c.) 干闥人の相貌頗る之に類するものあり、『魏書』卷一干闥傳に「自高昌以西諸國人、等深目高鼻、唯此一國、貌不甚胡、頗類華夏」といへるを見れば、太古に於て西藏方面より干闥に移住せしものか。

現に干闥に傳ふる建國の傳説には印度及び支那の兩方面より干闥に移住せし部族相合して國を成せりとし、『西域記』并に西藏の所傳 (Rockhill, *Life of the Buddha*, pp. 233 &c.) にも亦同一の記事を有す、今之を説明すれば印度の西北部印度河の上流地方より干闥に移住せしことを知り、スタイン氏はニヤの故跡に發見せし古文書の文字及び言語は明に印度古代の風にして、西曆第三世紀のものなれば、此時代に於て既に印度人が干闥の人口の大部分を占めしことを知るべし。前條に出せし『魏書』の文を見るに、後魏は西曆三八六年より五三二年に至る期間に存立せしが故に、『魏書』は第三四世紀に傳へし記事を載せたるものとすれば、支那方面よりの干闥移民も第三四世紀の以前なるべきを以て、前後を合一して之を判斷すれば、印度并に支那の兩方面より移民ありて干闥に建國せしは第三世紀以前に溯るものとす。(未完)